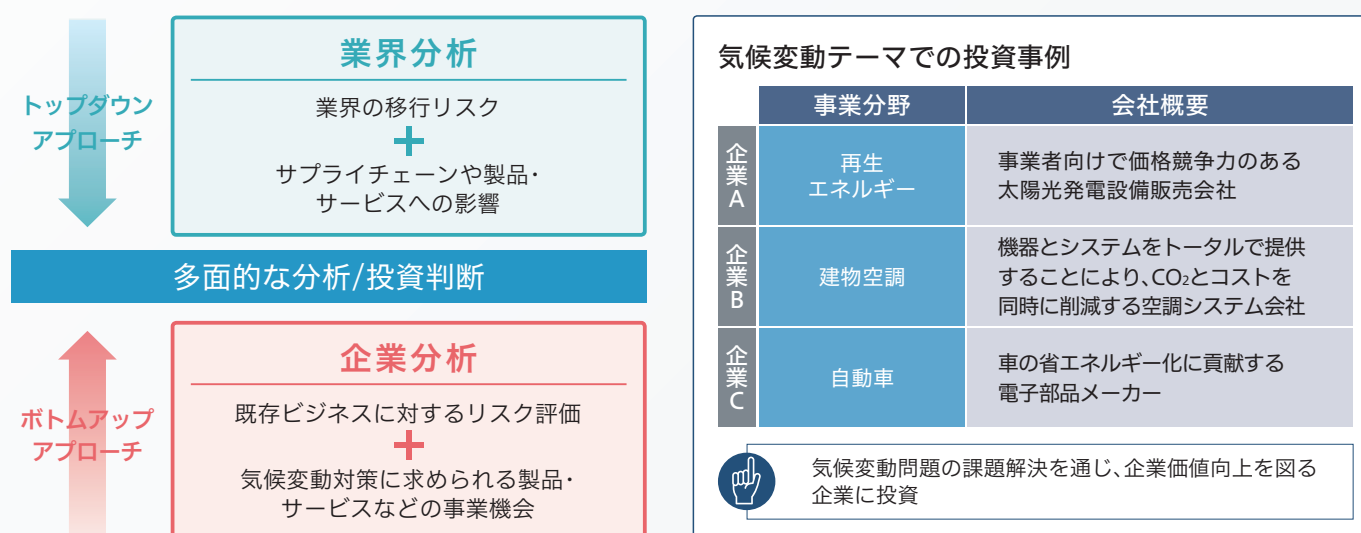


サステナビリティインベストメントチームと株式運用グループの取組み

投資先の気候変動のリスクと事業機会を的確に把握するためには、網羅的な業界分析とそれを活用した詳細な企業分析、定量・定性両面での情報の有効活用など、多面的な分析が必要となります。サステナビリティインベストメントチームと株式運用グループのアナリストは責任投資グループのESGアナリストと連携しながら、トップダウンとボトムアップ両面から詳細な分析を行い、それを運用部門で共有し、各戦略の投資判断に役立てています。

投資判断の際の2つの視点



気候変動テーマリサーチによるトップダウンアプローチ

SBT (Science Based Targets) の基準厳格化やEUタクソノミーの策定に向けた動きなど気候変動に対する国際的な潮流が変化の中で、気候変動対策が企業のビジネスモデルに影響する時間軸はますます短くなっています。当社では気候変動を、投資先企業への直接影響だけでなく、サプライチェーンや製品・サービスへの影響についても分析しています。

具体的には、化石資源からの排出削減や炭素除去技術の普及について時間軸を含めた影響予測を行った上で、既存ビジネスへの影響や気候変動対策関連の製品・サービスの需要を調査しています。

株式運用グループアナリストによるボトムアップリサーチ、エンゲージメント

株式運用グループのアナリストは、各企業の既存ビジネスに対するリスク評価だけでなく、気候変動対策に求められる製品・サービスなどの事業機会についても評価しています。中でも、電力セクターなどの気候変動の影響の大きいセクターにおいては、GHGの排出に係る中長期にわたるシミュレーションをScope1～3*の各段階で実施し、規制当局の動向などを踏まえて、セクター全体及び銘柄毎のリスクの大きさや事業機会の可能性などについて分析を行います。

エンゲージメント活動では、責任投資グループのESGアナリストと連携し、気候変動に関する対応策や事業機会の拡大施策等について、企業と対話を行っています。

*Scope1: 直接排出量、Scope2: 電力・熱の購入による間接排出量等、Scope3: 製品の使用時の間接排出量等

幅広い定量・定性データの活用

気候変動においては、各社のGHGの排出量やESGスコアなどの定量情報だけでなく、各社が発行している統合報告書等に記載されている気候変動に関する情報や、蓄積されているエンゲージメント記録など定性情報も活用します。また、ESG評価会社やシンクタンクによるリサーチ等の外部の情報も活用しています。これらの情報は、運用部門のファンドマネジャー・アナリストに共有され、投資判断に活用しています。